

ワールドカップ世代

小中学生の頃の大きなイベントというのは大人になっても覚えているもので、私にとっては大阪万博や札幌五輪であったりするわけだが、今の塾生にとってはこの日本開催のワールドカップがずっと心に残り続けるのであろう。

それにしても今回のワールドカップは実に大きな影響を与えたと思う。まず、日韓共同開催という初の試みが、「近くて遠い国」といわれた両国民の精神的な距離を一気に近いものにしたこと。特に開催前は慰安婦問題や教科書問題で何かとごたついていた負の遺産が、若者の連帯という大きなエネルギーによってまさにかすんでしまった感がある。これなどは何人の首相がどれほど謝罪するよりも大きな効果があったといえよう。

また、日本人の意識も変わった。一世代前は「日の丸」も「君が代」も教育現場や“進歩的”知識人の中では、戦前復古をにおわすものであり、むしろ嫌悪の対象とさえされてきたのだが、スタジアム中から沸き起こる国歌の斉唱や国旗、国名の連呼による応援は、オリンピックの比ではなかった。日本人、特に若者がこれほど愛国心に燃えていたのかと驚いた人も少なくはないのではないかと。「国旗国歌法」などという法律による規制よりも、今回のワールドカップ開催は何百倍もの効果があったといえよう。

最後に、日本がベスト 16、韓国がベスト 4に進んだことにより、ヨーロッパや南米のスポーツとされていたサッカー界におけるアジアの地位の向上をもたらしたこと。それはさらに経済的に不況にあえぐ日韓両国に「元気」と「自信」を与えたばかりでなく、今後国際社会に出てゆく若者に「アジアの誇り」というキーワードが心の支えとなってゆくかもしれないと考えると、今回のワールドカップは大成功であったといえよう。

もっとも旧態然とした左翼や右翼の思想家にとっては、「問題点は決して変わっていない」とでも言いそうだが、単に頭でなく、心(ハート)で感じてきたこの「ワールドカップ世代」を理解できない政党はいずれ衰退してゆく運命にあるのであろう。

若い種は日本にも韓国にも、おそらくサッカー後進国のほかのアジアの国々にも蒔かれたはずである。まだ芽が出て、花を付け実を結ぶまでには時間がかかるだろうが、この世代が社会の中心となるころの日本を私は見てみたい気がする。